檀一雄のこと

――――――足利ゆかりの文豪

図書館係　阿部健治

足女生の皆さんは「檀一雄（だんかずお）」という作家を知っているだろうか。
1976（昭和 51）年に亡くなっている（64 歳）から、忘れられがちではあるが、代表作の『火宅の人』(1975・第 27 回読売文学賞・第８回日本文学大賞受賞。1986 年に深作欣二監督によって映画化。緒形拳の演技と松坂慶子の美しさが忘れられない。）を初めとして多くの作品が映画化、ドラマ化（1992 年には代表作の一つである『リツ子その愛、その死』（リツ子は檀の最初の妻、結核で亡くなった。）がテレビドラマ化された。主人公を佐藤浩市が演じ、リツ子を今井美樹（名曲「PRIDE」を歌った人。皆さんも聴いたことがあると思う。）が演じた。あの時の佐藤浩市の姿は今でも筆者の脳裏から消えない。）された大作家である。近年では、2016 年 8 月に肺がんが判明し、「余命 3 か月」の宣告を受けた大林宣彦（尾道三部作で有名）が抗がん剤の治療を受けながら、遺作のつもりで撮った映画『花筐/HANAGATAMI』が記憶に新しい。『花筐』は檀の実質的なデビュー作（1937）だが、大林は映画監督になってすぐにこの脚本を描き上げていたようで、この作品は日本を代表する映画監督が、命を賭けて撮るにふさわしい素材だったということがわかる（大林は 2020 に亡くなった。）。

このように、檀は文学的な業績もすごいのだが、それ以上に、太宰治の一番の親友だったということで知られている（これは本人には不本意かもしれないが…）。彼らの関係を示すものとして、有名な「熱海事件」というものがあるので次に紹介したい。
1936（昭和 11）年、太宰は、11 月下旬から熱海温泉へ行き、ある小説を執筆していたが、脱稿した後も熱海にとどまっていた。一方檀は８月から 10 月末まで満州旅行に行き、日本に帰ってきたばかりの時だった。太宰の妻が檀の所に来て、太宰が金の無心をしてきたので、汽車賃も出すから、金を届けて支払いをして、できるだけ早く連れ戻ってほしいと頼んできた。久しぶりの再会だと喜び勇んで出かけた檀を太宰は歓待し、その勢いで連日どんちゃん騒ぎをして、むしろ借財を増やしてしまった。仕方がないので、太宰は檀を借金のかたとして熱海に残し、帰京して師匠の井伏鱒二や佐藤春夫らに借金を申し込むことになった。一方、熱海に残った檀は、いつまでたっても太宰が現れないのに業を煮やして東京に戻ってみると、太宰は井伏の家で将棋を指していた。檀が怒りをぶつけると、太宰はぼそりと「待つ身が辛いかね、待たせる身が辛いかね。」と言ったという。
無頼派（太宰や檀、坂口安吾、織田作之助らは文学史上こう呼ばれる。要するに「世間から顔を背けて生きた」ということだ。）の面目躍如といったところ（正直、あきれるしかない。）だが、この話を聞いてピンときた人がいれば（いるかな？）その人の文学的センスは一級品だ。
そう、この話は中学校の教科書にも載っている**『走れメロス』の元ネタ**なのだ。**檀一雄は「セリヌンティウス」**なのである。
それにしても、この滅茶苦茶な現実を、あんなに見事な（太宰の現実を知ってしまうとそう思えなくもなるのだが…）作品に仕立てる太宰の筆力には唸らされる。他の誰にも為し得ない、「水際だった」芸と言えるだろう（ただし、太宰という人間の胡散臭さ、これだけはどうしても好きになれない…）。

さて、だいぶ前置きが長くなってしまったのだが、この辺で本題に入ろう。
檀一雄と足利の間にはどのようなゆかりがあるのか、ということである。

檀一雄の父参郎は福岡県柳川市の旧家に生まれた（隣は北原白秋の生家だったらしい。若き日、一雄は白秋を耽読した。その影響でか、自ら詩集も作っている。足高の校庭には『虚空象嵌』という詩碑がある。）。参郎は一雄の母となるトミと結婚（参郎 30 歳、トミ 18 歳）した後、山梨県都留市の工業試験場に職を得た。1912（明治 45）年に一雄もそこで生まれるが、参郎はその後、東京、郷里柳川、弘前と転々と居を変え、1919 年になって足利工業学校（現在の県立足利工業高校）で職を得る（それまで一雄は福岡の祖父母の家に預けられていた。）。この時になって、一雄はようやく一家団欒の生活を知ることができた。７歳の一雄は柳原（現けやき）小学校の２年生になった。
ところがこの生活も長くは続かない。一雄の母トミは美しい人だったようで、父参郎は妻が他の男と情を通じているのではないかと常に疑い、嫉妬に駆られたようだ。妻に暴力をふるうことも度々あったらしい。彼女は一雄が４年生の秋に突然出て行ってしまい、結局帰らなかった。一雄の下に三人いた妹たちは幼いため福岡の実家に引き取られ、小学校４年生からは、一雄と父との二人暮らしが始まる。1924 年に両親は正式離婚するが、この年一雄は旧制足利中学（現県立足利高等学校）に入学。この後 1928（昭和３）年に旧制福岡高校（現在の九州大学）に進学するまで、約７年にわたり、この足利での父との生活は続いていく。
母に甘えることをなし得なかった一雄は、母の中に潜んでいる「女」を憎んだりもしたが、それで己の人生をダメにしてしまうほど彼の精神はヤワではなかった。福岡の母方の実家暮らし（旧家で祖父が絶対君主であり、誰も一雄をかまったりしなかった。）で「自然に親しむ喜び」を見出していた一雄は、足利の自然の中でも生を謳歌した。父と住んでいたのは西宮町にある長林寺（相田みつをゆかりの寺でもある）の離れ（修行者用の宿坊だったらしい）で、学校から帰ると毎日、両崖山中で遊び、飽くことを知らなかった。父は食事を作ることが全くできず、すべて小学生の一雄が作っていたというが、そうした興味から、山中の食べられるキノコ・野草（ワラビとかゼンマイとか）はほとんど試してみたという。楓の幹に傷をつけて甘い樹液をなめ（種類は違うだろうが、メープルシロップも楓の樹液である。）、鳥もちを仕掛けて野鳥を捕った（これは食べるためでなく、なつかせようとしたようだ。）。両崖山中の斜面で野宿したことさえあるらしい。一雄自身、この足利での生活を『私はこの寺に移り住んでから、云ってみれば、**一個の神仙であった**と答えていいかもわからない。』（「じじばばの花」―『来る日　去る日』より）と回想している。

筆者は檀一雄の人間性が好きだ。甘ったれで見栄坊の太宰治（しかし作品は最高だ。『斜陽』の文章など他のどの作家にも書けないものだと思う。）よりも、ぐれてはいるが、すべてに潔く、あたたかみのある檀一雄（たとえば、代表作の『火宅の人』を読んでもらえればすぐにわかると思う）の方がすっと好ましく感じるが､そうした人間性が足利の自然の中で育まれたと思うと誇らしくもある(長林寺の裏から両崖山へ登る道は、筆者お気に入りの散歩コースでもある)。

檀一雄は檀ふみ（女優）らにあてた「娘たちへの手紙」の中で次のように言う。
「あらゆる生命は、神から放たれたか、生産する自然力とでもいったような根源の力から生み出されたのか、知らないが、その無限の造物の力によって、まるで、みじめな、それぞれの道化を演じさせられるあんばいに、この地上にほうり出されてある。」（中略）「悲しいけれども、人間は、たったこれだけのものである……、ということを、まず、知るべきだろう。いや、必ず、知ることになる。」（中略）「まことにみじめではあるが、私たち一人一人に、命という、自分だけで育成可能のなんの汚れもない素材が与えられている。おまえたち一人一人は、その汚れのない一つずつの素材を与えられた、芸術家であり、教育者であり、いってみれば、自分自身の造物主であり、いや、ちっぽけな、哀れな、神ですらあるだろう。なぜなら、おまえたちの命のありようは、おまえたちが選ぶがままであり、おまえたちの命の育成も、おまえたちの育成するがままだからだ。」
どうだろうか。これは檀が自らの娘にあてて書いたものだが、筆者はこれを**すべての娘たちに届けたい**ものだと思っている。